

「信徒発見」 サンクタ マリア ノ・ゴゾウ ハドコ

開港と宣教師の再来

1854 年、徳川幕府はペリー提督を介してアメリカ合衆国との間に和親条約を結び、その後日本は開港しました。1859 年から、長崎を含む 5 港が順次開港し、長崎には外国人居留地が置くことが定められました。

当時東アジアでの布教を積極的に進めていたローマ教皇庁は、日本で宣教を再開する機会を模索していました。そして、1838 年当時既にベトナムや中国で盛んに活動を行っていた「パリ外国宣教会」にこの任務を命じました。横浜が開港すると、琉球で待機していた同会のプリュダンス・ジラル神父がフランス公使の通訳として来日しました。1863 年には、ルイ・フーレ神父が長崎に到着し、ベルナール・プティジャン神父もすぐにそれに続きました。

大浦天主堂の建設と信徒発見

ジラル神父が 1862 年に横浜天主堂建設を建設した後、フーレ神父とプティジャン神父は長崎にて大浦天主堂の建設に着手し、1865 年 2 月に献堂式が執り行なわれました。大浦天主堂は、表面上は居留地に住む外国人のためのものでしたが、神父らの来日の最大の目的は長崎の潜伏キリシタンを見つけ出すことでした。

その日はすぐにやってきました。1865 年 3 月 17 日、浦上の潜伏キリシタン十数名の集団が大浦天主堂を訪れました。この日こそ彼らがプティジャン神父に信仰を告白した日でした。プティジャン神父はこの出来事を以下のように記しています。

40 歳ないし 50 歳くらいの女性が私のすぐそばに来て、胸に手をあてて言いました。「ここにいる私たちは皆、あなたと同じ心です。」（中略）「サンクタ マリア（ノ）ゴゾウ ハドコ」サンタ・マリアの祝別された言葉に、私はもう少しも疑いませんでした。私は確実に、日本の昔のキリシタンの子孫を目の前にしているのです。

（1865 年 3 月 18 日付 プティジャン書簡）

およそ 2 世紀半にわたる禁教・弾圧がまだ続いていたさなかで起こったこの劇的な事件は、「信徒発見」と呼ばれています。この出来事は、弾圧によって日本に信徒はいなくなったと考えていたヨーロッパの人々を驚かせました。

この最初の接触は転機となりました。この地方の潜伏キリシタンたちは、カトリックへ復帰する者、これまでの信仰形態を続ける「かくれキリシタン」、そして仏教や神道へ転宗する者などにわかれていきました。

（左）フーレ神父が描いたと考えられる大浦天主堂の設計図

1864 年頃

（パリ外国宣教会）

（右）上野彦馬撮影

《大浦天主堂》

1865 年頃

（江崎ベツ甲店）

正面には日本人にもわかるよう「天主堂」の文字が掲げられた。

《大浦天主堂でのクリシタンの信仰告白》

ヴァリヨン『日本聖人鮮血遺書』 1926 年より